

発展途上国や海外の子供達へのスポーツ支援

桐蔭横浜大学田中ゼミ T チーム

○小林幹弘 味澤一輝 小野田英祐 長谷川侑希 相良瑞樹

～現状～

私たちの班は、発展途上国や災害の被害にあった人たちを対象としてのスポーツ支援についての研究を発表したいと思います。

現在、発展途上国や災害にあった地域にたいして多くの国や団体がさまざまな支援を行っており、その活動は発展途上国の国民に対してプラスに作用している活動も多いといえる。その中で今回触れるのは、発展途上国に対してのスポーツ支援活動についてである。日本だけでも、NPO や NGO、行政やボランティア、企業など様々な団体が発展途上国にスポーツ支援をおこなっている。

主にどのような活動が行われているのかというと、発展途上国の学校などでスポーツの技術向上や普及を目的とした支援や、用具などを送る物的支援、スポーツ指導者を派遣しトップアスリートの育成など様々な支援が行われている。このようなスポーツ支援が見据える未来としては、スポーツを通じての発展途上国の発展。健康水準の向上、国民の人間性を豊かにする、トップアスリートの育成など様々な要因が見込めるが、なぜ、このような支援が多く行われている状況で発展途上国に対しての支援がよい結果に結びついていない現状があるのか。あげられる要因としては、支援対象となる国や地域の多さと支援活動を行う団体や人材が比例しておらず、すべての地域や人々に届けるための支援が行き届いていないという現状があげられる。

～災害地域の復興状況～

今回は対象とする地域としてあげられる災害地域の例としてアジアのフィリピン、ネパールをあげる。まず、フィリピンでは、災害により毎年 1000 人以上の命が失われている。そのうち台風による被害は、死者の 74%、を占めている。

2013 年 11 月にフィリピンを襲った台風ハイヤンは観測史上最大で、国家災害対策本部によると 12 月上旬までに確認された死者数は 5796 人、行方不明者は 1800 人近くにのぼった。完全な復興には 3～5 年かかる可能性が指摘されていた。これに対して日本は建築物やインフラの強靱化に取り組んだ。この取り組みの一環として、日本の建築規制の専門家がフィリピンの国家建築基準の見直しを支援する取り組みも予定されていた。

次に例としてあげるネパールは 2015 年 4 月ネパール大地震により、死者 8896 人、行方不明者 198 人、負傷者 22302 人という被害を受けました。震災より 3 年が経過した最近になりやっと復興の兆しが見えてきたところである。ネパール地震での主な被害は家屋や給水施設などの建物倒壊であり、その再建のために現金収入を求めて海外への出稼ぎが増えネパールの農村の過疎化、空洞化が懸念されている状態である。

～PTSD について～

紛争地域や災害の起きた地域では、PTSD という症状がみられる。PTSD とは、心的外傷後ストレス障害のことであり、強烈なショック体験、強い精神ストレスが、心のダメージとなって、時間がたってからも、その経験に対して強い恐怖を感じるというものです。自然災害、火事、事故、戦争、暴力や犯罪被害などが原因となるといわれており、例としては、イラク戦争後、海外に派遣された米兵や退役軍人の中で、PTSD を発症するものや、日本では阪神淡路大震災の後に PTSD を発症している者もいた。

症状は、当時の記憶が突然フラッシュバックすることや悪夢を見るといった侵入症状、原因となった状況をさげようとする、回避症状、原因となったことをきっかけに自分や周囲の人が変わってしまったと感じてしまい誰も信用できなくなり、感覚が麻痺してしまい楽しさを感じられなくなってしまう、承知と気分の陰性の変化、常に感情が張り詰めてしまい危険を感じてしまうことによって睡眠障害が起こることや、物事に集中できなくなる、怒りっぽくなる、少しのことで過剰に反応してしまうなどの症状に加え、薬物やアルコールに逃げ場を求め依存症に陥ってしまう、覚醒度と反応性の著しい変化などがあげられる。

このような症状がみられる PTSD に対して、米軍では、海外派遣から帰国した兵士に対してメンタルヘルスに関する自己評価を行わせている。そこでストレス障害の恐れがあるものは、診断や適切な治療が行われている。

治療方法としては、持続エクスポージャー療法というものがある。これは、トラウマとなった場面をあえてイメージすることや、これまで避けていた記憶を呼び起こすきっかけにあえて身を置くようにする治療法である。こうすることで、思い出しても危険はない、ということを感じ取っていくものである。この治療は、専門の治療者の立会いのもとに、今の状況が安全であることを患者が理解したうえで行おう必要がある。そのほかの治療法には薬物療法、持続暴露療法などがある。また、PTSD の患者には安心して安全な環境を作ることが大切である。

その要因としてあげられるのは、その地域で普段からスポーツや運動をする習慣がなく、あまり重要視されていないということや、用具や場所などが足りておらずスポーツができない原因となっていたり、多くの人が働いていたり、子供は家の手伝いをしたりなど余暇時間を確保できておらず、スポーツや運動が根付かない要因となっているのである。

～貧困層～

貧困層とは、人間として最低限の生活を営むことができない状態のこと。貧困には、種類が二つある。絶対的貧困と相対的貧困がある。ネパール、フィリピンは、絶対的貧困に分類され、国民の4分の1以上が貧困層に含まれる。日本は、貧困率が16%であり貧困率が高い国の一つでもある。しかし、日本における「貧困」は、絶対的貧困ではなく、相対的貧困から考えられています。日本の貧困、つまり相対的貧困は、所得の中央値の半分を下回っている状態として定義されています。年によって変化はあるものの、日本

の所得の中央値は概ね年収 250 万円。その半分に当たる年収 125 万円以下は、日本では「貧困」と定義されるのである。次に貧困層とされる人たちの暮らしについてである。貧困層とされる人たちの中でも絶対的貧困とされる人たちは、家もなく食事もしっかり取れていないのが現状である。ネパールでは、橋の下など、ゴミが山のように積んであるところで、お金になりそうなものをゴミの中から探し出し、それを売ってお金にし、生活をしている。フィリピンでは、ストリートチルドレンとされる人たちが多く、その多くが 11 歳から 14 歳の男の子が多く約八割が男子である。この子達は、ほとんどが学校にいておらずいけない理由として、経済的困難があげられる。仕事は、盗み、靴磨き、新聞やタバコなどの物売りなどで生計を立てている。ストリートチルドレンの約半数は、最低一度の逮捕経験があり、逮捕されている間の留置所で不法商売の方法を教わる子供も多くなる。フィリピンのマニラには、スモーカーマウンテンと呼ばれる巨大ゴミ集積所があり、そこでごみをひろったり、店舗で出るゴミを集めたり、リサイクルショップに売れるゴミを集める子供達がいる。彼らは、ひどい労働環境に置かれている。強い日差しの下で、ダイオキシンなどの有害物質が発生しているゴミの中を、ハエやウジ虫を踏みつけながらゴミを拾っている。このような子達は、スラムやマンホールなどで生活している。行き場が失った子ども達がマンホールで暮らしています。このような子達を、マンホールチルドレンという。マンホールの中には温水供給パイプが通っていて地上よりも暖かいからである。しかし、マンホールは汚水が漏れている所、虫が湧いている所があるなどその環境は劣悪で、子ども達は常に感染症や皮膚病の脅威にさらされてるのである。

～運動支援～

私たちがどんな運動支援などを行うかという、災害の起こってしまった地域や紛争が起こってしまった地域などで生活が不自由で不活動の状態が続いてしまった人を対象としてその結果、エコノミークラス症候群やロコモティブシンドロームというものになってしまう可能性があるのである。まずエコノミークラス症候群とは足の血液の流れが悪くなり、静脈の中に血の塊（静脈血栓）ができることがあるのである。この静脈血栓は歩行などをきっかけに足の血管から離れ、血液の流れに乗って肺に到着し、肺の動脈を閉塞してしまうのである。次にロコモティブシンドロームは運動器に障害を与えてしまうというものである。どちらもとても怖いものであることには間違いはないのである。そうならないためにも、運動を続ける必要があるのである。その具体的な運動とは、歩いたり、体操をしたり、ストレッチをするのがとても有効なのである。しかし対象は子どもたちなのでやはり楽しい運動がいいのである。そこで歩いたりするのは鬼ごっこなどの遊びに変え、ストレッチは二人一組になり、組体操のようなストレッチを行ったりして楽しく実施できる内容とする。そして紛争とかだと既に怪我をしてしまっている子どもたちもいるのである。手を怪我してしまっている子どもたちはケンケンパなど足を使った運動をして血流、筋力を維持させることが大事である。逆に足を怪我してしまっている子どもたちは手遊びをして何もしないで硬直しないよう手の運動をすることが大事である。

これらに加えて先ほどのような不自由で不活動、そして紛争で傷ついてしまうと心身の健康が脅かされる危険性が高くなるのである。そこで運動は生活のリズムをつくり、ストレス対策にも有効なことである。つまり運動をすることで傷ついてしまった心のケアにもつながるのである。つまりここでは身体の健康のための運動も大切だが楽しむということも並行して考えなければならないのである。

～支援の形態～

支援の形態としては非営利団体として活動する。ですが今回私たちが主に考えているのが被災地なども入っているので、あくまでボランティアとしての活動となる。しかしお金はないと何も行動ができないので資格要件を満たし、私たちの考えた支援をアピールし、社会的必要性を感じてもらい、助成金や補助金を利用して考える。給料は出せないかもしれないが現地に行く交通費などの飛行機の代金、支援先での生活費などは団体に負担しようとする。

～支援を行う人々～

今回私たちが支援をしようと考えている場所が外国というのもあるので通訳の方とコーディネーターを募らなければならないのである。通訳の人は大学生や将来通訳の仕事をしたと考えている人たちに協力を求めたいと考える。

コーディネーターはその場を仕切ったり、物事を円滑に進めたりしてくれる人が必要だと思ったからである。コーディネーターはこれらを企画した自分たちが行なってもいいのだが自分たちの他に機転がきく方や募集をかけて集まってくれた大学生や経験を積みたいと思ってくれている人の中から選ぶ方法も可能だと考える。

～総括～

このような支援活動を行う事の重要性として、スポーツやレクリエーションを通してコミュニケーションをとることで、集団行動やチームプレイ、自己主張などの社会的なスキルを身に着ける事が出来るとともに、心身ともに回復すると考えられる。それらのスキルを身に着ける事がこの支援活動の目的ともいえる。

引用参考文献

鈴木 滋：「メンタルヘルスをめぐる米軍の現状と課題」

岩井 圭司：「災害後のPTSD」

厚生労働省 知ることからはじめようみんなのメンタルヘルス
https://www.mhlw.go.jp/kokoro/known/disease_ptsd.html

OPERATION BLESSING JAPAN

https://objapan.org/lp/philippines_support/

HAFFPOST

https://www.huffingtonpost.jp/john-roome/effort-to-disaster_b_10709500.html

ネパールにハマー

<https://nepal-lovers.com/2017/11/earthquake-2halfyears-2017/>

ユニセフ

<https://www.unicef.or.jp/news/2017/0281.html>

アジアのGDP

http://ecodb.net/ranking/area/A/imf_ngdpd.html

アジアの少年兵

<http://volunteer-platform.org/heisi/>

マンホールチルドレン

<http://yuimar.org/manhole-children/manholechildren/>

貧困層

<https://cfc.or.jp/archives/column/2009/11/16/4075/>

ストリートチルドレン

<https://www.obirin.ac.jp/la/ico/con-sotsuron/sotsuron2010/2010M-oose.pdf>